

演題：家族を支える「いのちのつながり」～家で過ごすということ～

(平成 28 年 1 月 29 日 白山 宏人 講師)

白山先生は、大学で経済学を学ぶ学生であったそうです。文系学部の生徒であった白山先生が在宅医療の世界になぜ踏み込んでいったのか、そのきっかけは何だったのか、まずはそのことが気になりました。講演が始まると、その気付きもあつという間に氷解していました。理由は単純。ご友人からの「ええんちゃう！」という一言の後押しにより、理系である医学部へ入学されたそうです。なるほど、なにげないように感じる一言が、他人の人生を大きく左右することもあるのだと、まずは変に感心してしまいました。

在宅医療の世界に従事される白山先生は、がん患者等の様々な患者の診療や看取りに関わってきており、在宅、病院、市民（患者を含む）の三者が地域内相互で支え合える体制作りを目指しておられます。そういったご経験をふまえて見出された「生活の場」における様々な「いのちのつながり」を丁寧にお話していただいた講演でした。

聴講するにあたり、「言葉の力」「向き合うことの大切さ」「つながり（巡り合わせ、縁）による支え」という白山先生が挙げられた3つのキーワードを意識しました。

いわゆるグリーフケアについては、耳にする機会も多く、少しは理解しているつもりですが、グリーフワークとなるとその違いがよくわからないままでしたので、白山先生にお話していただけてよかったと思いました。「死別、死というものをどう受け止めるのか。まず、喪失の現実を受け入れ、悲嘆の痛みを消化し、故人のいない世界に適応し、そして故人との永続的なつながりを見出すこと」「過去を振り返り、今に向き合う、自分なりの意味を見出していくこと」「それは、死別に対する適応作業であり、修復作業であり心の再構築に向けて適応していくプロセスである」とご説明してくださりました。なるほど自身を振り返れば、これまで何度か大切な人との死別を経験し、知らず知らずの間にグリーフワークというものを行っていたのだと思い、納得がきました。

その他、特に感じたことを書き留めておきます。悲しみの意味の中で、「つらいことにも意味がある」「その時のつらさや苦勞も意味がある」といったこと。つながりについては、「この人生で起こることには、どんなことにも意味がある。人生に偶然はない。全て必然であり、それを感じるかどうかは自分自身である」といったこと。普段から人生の終末を考える必要がある、「生き方（逝き方）を考えるべきだ」ということ。死と向き合い、地域で支え合うことの大切さや、「無理なく、自然に、日常の中で死と向き合うことにより遺された人々も成長していけること」等々。

映像でありました MY LITTLE LOVER さんの名曲「Hello, Again～昔からある場所～」がとてもよかったです。「記憶の中で ずっと二人は 生きて行ける」という歌詞はとても心に響きます。この歌詞を聴き、白山先生のお話にあった「死別を意識してから死別までの時間がとても大切であること」や、死別の際にも、「立ち会えたかどうかが大切ではなく、どうつながって日常を重ねたかが重要である」ということが深く心に印象づけられ、あらためて考えさせられたと思います。